

【研究論文】

1992年の「精神薄弱」用語問題:

議論1・『発達障害研究』(日本精神薄弱研究協会)1992年 第14巻 第1号を中心に

《Original Article》

Argument About the Terminology Problem of "Mental Deficiency"
in 1992.

鶴田一郎

Ichiro TSURUTA

『広島国際大学 教職教室 教育論叢』

“*Hiroshima International University Journal of Educational Research*”

ISSN:1884-9482

第12号 抜刷

Off Print of the 12th edition

広島国際大学 教職教室

Issued by Hiroshima International University Teacher Education Unit

2020年12月

December, 2020

1992年の「精神薄弱」用語問題:

議論1・『発達障害研究』(日本精神薄弱研究協会)1992年第14巻第1号を中心に

広島国際大学 教職教室 鶴田一郎

要旨: 知的ハンディキャップを持つ人を、どう呼称するかは、現在に至るまで議論が途絶えることが無い。それは、どのような「用語」を用いても変わらない。本研究では、筆者の師である伊藤隆二教授が提唱している『障害児』から『啓発児』への思想を研究の出発点とする。近江学園の創業者・糸賀一雄氏は「この子らを世の光に」と言われたが、伊藤教授は、それを更に進めて「この子らは世の光なり」と主張される。なぜ「この子らは世の光なり」なのか、また、なぜ「障害児」ではなく「啓発児」なのか、ということの本研究は解き明かしたい。その際、1992年に特に集中した「精神薄弱」用語問題に関する議論を中心に考察を進めるのだが、今回は、1992年の日本精神薄弱研究協会『発達障害研究』第14巻第1号「特集『精神薄弱』用語問題を考える」に焦点を当てて検討を進めた。なお、その前提として、1992年の「精神薄弱」用語問題の議論に先立つ前年(1991年7月7日)の日本精神薄弱研究協会第26回研究大会(日本福祉大学)におけるシンポジウム『精神薄弱』の呼称・用語および概念の再検討も視野に入れ考察した。その結果、医学・心理学・教育学・福祉学・法学といった各学問分野からの議論のみならず、当事者や保護者の視点も加味され、検討が続けられたことが分かった。これらの検討が1992年7月24日の「日本精神薄弱研究協会」の評議員会及び総会において「日本発達障害学会」と改称することの決定に繋がっている。ただ「精神薄弱」という言葉は除去されたが、「発達障害」という言葉は残った。つまり「障害」という言葉は残った。

はじめに—問題の所在—

特別支援教育に関する内外の歴史研究は興隆を見せている。それは教育方法論や実践論に加えて、歴史的社会的文脈における特別支援教育の在り方が重視されてきているからである。その際、研究に用いられる用語、特に知的ハンディキャップを持つ人々を、どう呼ぶかは、いつの時代でも議論の的であったのにもかかわらず、いつの間にか忘れられる。現在は「知的障害」あるいは「精神遅滞」で統一されたかに思われるが、それにも問題がないわけではない。1980年代までは「精神薄弱」が使われていた。それでは、なぜ現在は「知的障害」「精神遅滞」で統一されているのか。その謎を解く鍵は1992年に知的ハンディキャップに関する研究団体・支援団体などが行った「精神薄弱」

用語問題に関する議論にある。そこで本研究では1992年の「精神薄弱」用語問題の議論を中心として、その前後のみならず、現在までの、この問題についての検討を背景に、今後、この議論を深めていく際の客観的な「たたき台」を提示しようと思う。

今回は、1992年の日本精神薄弱研究協会(1992)『発達障害研究』第14巻第1号「特集『精神薄弱』用語問題を考える」を中心に検討を進める。なお、その前提として、1992年の「精神薄弱」用語問題の議論に先立つ前年(1991年7月7日)の日本精神薄弱研究協会第26回研究大会(日本福祉大学)におけるシンポジウム『「精神薄弱」の呼称・用語および概念の再検討』（日本精神薄弱研究協会第26回研究大会実行委員会1992）も視野に入れつつ考察する。

後に1992年7月24日「日本発達障害学会」と改称される「日本精神薄弱研究協会」だが、一貫して「研究者の集まり」を自認してきた。現在の「日本発達障害学会」(2017)のHPでは「日本発達障害学会の概要」として次のように「設立・沿革」「事業」についてまとめられている。

「設立・沿革」については次のように述べられている。

1964年8月に国際精神薄弱研究協会(The International Association for the Scientific Study of Mental Deficiency. 1992年第9回世界大会において国際知的障害研究協会 IASSID に改称)が設立され、初代会長に、当時のアメリカ精神薄弱研究協会(American Association on Mental Deficiency)会長の Stevens, H.A. が選ばれた。わが国では、この国際研究協会の要請を受けて1966年7月に日本精神薄弱研究協会を設立し、当時、国際研究協会の日本代表理事であった菅 修^{かんおさむ}が初代会長となった。1978年、菅修死去に伴い、三木安正^{みきやすまさ}が会長に就任。1979年、従来の会誌に代えて、機関誌『発達障害研究』（季刊）の編集・刊行を開始。事務局の所在地は、国立秩父^{ちちぶ}学園、全国たばこセンタービル内、ルート飯田橋ビル内、九段南^{くだんみなみ}グリーンビル内^へを経、現在、パレドール六義園^{りくぎえん}北内におかれている。1984年、三木安正死去、1985年、秋山泰子^{あきやますこ}三代目会長に就任。1991年、有馬正高^{ありまさたか}四代目会長に就任。2006年より五代目会長に、原 仁^{はらひとし}就任。引き続き、国際知的障害研究協会の構成団体として、理事会に役員を派遣。日本学術会議第一部に加盟。1992年名称を日本発達障害学会「The Japanese Association for the Study of Developmental Disabilities (JASDD)」に改称。

〔日本発達障害学会 2017〕

「事業」については次のように述べられている。

1.機関誌『発達障害研究』（季刊）の編集・刊行。2.年次研究大会の開催。3.日本知的障害福祉連盟〔現在「日本発達障害福祉連盟」——引用者、以下同じ〕諸事業への協力・参加。日本知的障害福祉連盟は、本学会と以下の3団体によって構成されている。全日本特別支援教育研究連盟、日本知的障害者福祉協会、全日本手をつなぐ育成会。

〔日本発達障害学会 2017〕

なお、1992年の段階では、機関誌名は『日本精神薄弱研究協会会誌』（1967年発刊）から既に『発達障害研究』（1979年改称）に替わってから10年以上の歳月が過ぎていた。[なお、日本発達障害学会の史的発展については、有馬・原・池田(2010)、山口・菅野・池田(2011)、高橋・原(2012)、池田・菅野・小島(2014)に詳しいが、本論文の主題からは逸脱するので割愛する。]

1. 『発達障害研究』1992年第14巻第1号での議論

本節では、1991年7月7日に行われた日本精神薄弱協会・第26回研究大会・シンポジウム『精神薄弱』の呼称・用語および概念の再検討(日本精神薄弱研究協会第26回研究大会実行委員会1992)も視野に入れつつ、『発達障害研究』1992年第14巻第1号「特集『精神薄弱』用語問題を考える」を中心に検討を試みる。その際、各執筆者の見解を適宜、引用しつつ考察を進めていきたい。

1.1 「障害児」から「啓発児」へ—伊藤隆二—

伊藤隆二は1992年の「精神薄弱」用語問題の端緒となる論文、『障害児』から『啓発児』へ—今まさに転回のとき—を1990年に発表している(伊藤1990a)。本項で取りあげる論文(伊藤1992)も「特集『精神薄弱』用語問題を考える」の前に巻頭「展望論文」として掲載されている。そのことから1992年の「精神薄弱」用語問題に先立つ最初期の提案者の一人として伊藤が位置づけられていることが分かる。なお、伊藤(1992)から重要点を以下に引用する。

この子ら[知的ハンディキャップのある子供たち—引用者、以下同じ]は、能力主義的評価判定基準では「無きに等しき者」[新約聖書では「最も小さき者」とも呼ばれる]とされるが、その基準を捨てて、人間の本質を正しく見据えるならば、美事に光り輝いている、という真実が明白になる。この子らはその真実を目の曇っている人びとに知らせるといふ使命(calling)をもってこの世にもたらされたのだ、と私(伊藤)は思いたい。そうであれば、この子らが世の啓発者となり、目の曇っている人びとの知を啓き、目を啓き、耳を啓く。

もっとも、自称「科学者」ならば、そのような形而上学的な解釈を一笑に付し、もっとこの子らの実態に即した用語をつくるべきだと、主張するだろう。それならば、少なくとも、これまでに述べてきた弊[「精神薄弱」も「精神遅滞」も「障害」も本来、不適切な言葉なのに使われ続けている現実があること]に陥らぬように、十分に注意を払いつつ、だれもが明るい気持ちになり、希望を見出せるような用語をつくるべきである。念を押すが、「精神」「害」「弱」「遅」「滞」「低」などは絶対に使わないことである。人びとを「否定」から「肯定」へ、「絶望」から「希望」へ転換させるのはまさに正しく、美しい言葉なのである。〔伊藤1992, p.7〕

伊藤によれば、知的ハンディキャップのある「この子ら」は「障害児」ではなく「啓発児」であることは明らかだ、という。「弱い者」である「この子ら」が啓発する人々は一般の人々よりも強い人々である。特に自分の家柄や地位や財産や名誉を誇る「強い者」である。このような「強い者」

は眼が曇っていて正しくものが見られない。しかし「強い者」の内、目覚めた人たちは、「弱い者」である「この子ら」の放つ「光」によって曇った眼が晴れ渡る。その「光」は視点を低きに転換する力があり、そのことにより、地上にいるすべての人が互いに理解し、助け合い、補い合う社会の実現可能性が開けてくる。正に「この子らは世の光なり」（伊藤隆二）なのである。したがって「障害児」という言葉は存在する意味を失い、「この子ら」を呼ぶとすれば、普段は各々の名前で呼ぶことは当然として、「この子ら」を敢えてまとめて表現しなければならない時は「啓発児」と呼ぶのが相応しい。以上は、伊藤隆二が発表された論文(伊藤 1983・1985・1990a・1991・1992・1994a・1994b)・著書(伊藤 1988・1990b・1995)・直接にお話を伺ったこと(大学院修士課程から現在まで)を検討した結果、明らかになった事柄である。

1.2 要支援度による分類—櫻井芳郎—

櫻井芳郎(1992)は「福祉臨床の立場」からの問題提起を行っている。重要点と思われる箇所を以下に引用する。

「精神薄弱」という用語は人権上、問題があると関係者の間でいわれて久しい。

伊藤隆二は厚生省心身障害研究報告書[伊藤 1991——引用者、以下同じ]のなかで、用語(言葉)は学問の進歩や時代の社会思想を写し出すという観点から「精神薄弱」の用語の由来を国内外の社会的背景をふまえて考察し、結論として不適切語であると述べている。この問題は関係団体だけでなく、国会でも論議されるなど、各方面で取りあげられている。

しかし「精神薄弱」用語問題に関する一般市民と心身障害関係者との間では、その態度や意識に大きな隔たがりがあり、また、心身障害関係者の間でも多様であり、共通の理解が得られていない。このようなことを考えあわせると、社会の人々のもつ「精神薄弱」の概念の変革なしに用語だけを改正しても、新しい用語が偏見や差別を帯び、事態は変わらず、百年河清を待つに等しいであろう。

したがって、目下の急務は社会意識の変容に一般市民、障害をもつ人、関係者などが力をあわせて取り組むとともに当面は「精神薄弱」の用語に代えて、“発達期における精神機能の損傷(Mental impairment) <あるいは知的機能の障害(Intellectual impairment)>によって生じた学習困難児(子どもの場合)、あるいは要援助者(成人の場合)”として、必要とする援助内容を示すことを提案したい。 [櫻井 1992, p.17]

「要支援度による分類」という櫻井芳郎の発想は、The American Association on Mental Retardation(1992)[邦訳：アメリカ精神遅滞学会(AAMR) 1999]における着目点と軌を一にしている。なぜ櫻井が、このような発想をしたのかについては、1991年のシンポジウムで次のように櫻井自身によって明確に述べられている。

精神薄弱者福祉臨床というのは、人権尊重、共存の思想をふまえて、精神薄弱児・者が心身の障害にめげず、人間として精一杯生きていこうとする努力を人間愛で支え、見守り、人間として成長していくうえの妨げとなる

危機場面を早期に発見し、さまざまな社会資源を活用して問題解決を援助し、生きがいを感じられる人間生活が
いと
営めるように願い、それをめざして対象者とともに歩む援助活動をいいます。

〔日本精神薄弱研究協会第26回研究大会実行委員会1992, p.222〕

1.3 差別的意識の変革を—山口薫—

山口薫(1992)は「教育の立場」からの問題提起を行っている。重要点と思われる個所を以下に引用する。

ことばは生きものである。どんな美しいことばで呼んでみても、呼ばれるものに対する差別的意識がなくな
らない限り、新しいことばは必ずまた汚れていく。

私たち[山口ら執筆者——引用者、以下同じ]がここ[『発達障害研究』誌上]で「精神薄弱」という用語を考え
ることは、用語を考えることによって精神薄弱と呼ばれている人たちに対するわれわれの意識を変革しようと
いうことなのである。

そうだとすれば、適切な用語を見つけるのに長い時間と苦しみが伴うのはむしろ当然なのではないだろうか。

〔山口1992, p.22〕

用語問題に先行して、社会の側の「差別意識の改革」を求める山口の姿勢は一貫しており、1985
年の段階でも次のように明確に主張されている。

今後最も適切な用語を求めて検討を続ける必要があるが、用語を検討するにあたって留意しなければならない
ことは、実態にふさわしい適切な語を用いることは大切ではあるが、より大切なことは、「精神薄弱」と呼ぼう
が「精神遅滞」と呼ぼうが、そのことばで呼ばれる人たちへの社会的意識を変革することにあるという点であ
る。

〔山口1985, pp.6-7〕

1.4 法律から「精神薄弱」という用語を一掃するために—長谷川泰造—

長谷川泰造(1992)は「法律家および親の立場」からの問題提起を行っている。重要点と思われる
個所を以下に引用する。

「人間の病気や特殊な症状に名前をつけるのは、治療や教育、更生の指針にするためであろう。だから私[長
谷川——引用者、以下同じ]は自分の子ども[“重度重複障害児”(長谷川自身の言葉)]のことを他人に紹介すると
きに、脳障害児とは言っても『精神薄弱児』とか『心身障害児』などとは口がさけても言えない。-----『精神』
や『心』と肉体は全く別のものであり、本来身体の一部である脳の障害を即、精神や心の障害と結びつける
のは一体なぜだろう。それは脳のしくみと働きについての無知にほかならない」(全日本特殊教育研究連盟機関
誌、発達の遅れと教育1985年7月号 巻頭提言の拙稿[長谷川1985, p.1]より)

上記機関誌はかつて「精神薄弱研究」と題されていたものを改題された。

「精神薄弱」という用語が法律から無くなるためにはまずこの言葉が現場で死語とならなければならないだろう。本誌[『発達障害研究』]を編集する団体[「日本精神薄弱研究協会」]もそろそろ協会名を改称したらいかかと思う。同様にその他の団体、^{たと}例えば、愛護協会[「日本精神薄弱者愛護協会」]、育成会[「全日本精神薄弱者育成会」]等々すべての団体から「精神薄弱」という文字が除かれたときに法改正の機は熟したと言えるのではあるまいか。 [長谷川 1992, p.32]

長谷川が上で指摘した「日本精神薄弱研究協会」は、この研究誌が発行された1992年5月の後、比較的短期に、7月24日「日本発達障害学会」と改称した。この団体も含めて「精神薄弱ご四家」と呼ばれる4つの団体がある。その4つの団体の連合体が1974年10月に結成された「日本精神薄弱福祉連盟」であり、その後1998年7月に「日本知的障害福祉連盟」と改称、更に2006年に「公益社団法人 日本発達障害福祉連盟」に再改称されたものである。以下、4つの団体それぞれの機関名や機関誌名の変更の推移をまとめて記述してみたい。なお、波線は長谷川論文が発表された時点(1992年5月)での「名称」である。

1.4.1 「研究者の集まり」

機関名の変更：1966年7月設立「日本精神薄弱研究協会」

→1992年7月24日改称「日本発達障害学会」

機関誌名の変更：1967年発刊『日本精神薄弱研究協会会誌』

→1979年改称『発達障害研究』

1.4.2 「施設関係者の集まり」

機関名の変更：1934年設立「日本精神薄弱者愛護協会」

→1999年改称「日本知的障害者福祉協会」

機関誌名の変更：1954年発刊『愛護』

→1992年4月改称『AIGO』→2002年4月改称『さぼーと』

1.4.3 「教育関係者の集まり」

機関名の変更：1949年設立「特殊教育研究連盟」

→1953年改称「全日本特殊教育研究連盟」

→2006年改称「全日本特別支援教育研究連盟」

機関誌名の変更：1950年発刊『児童心理と精神衛生』

→1956年改称『精神薄弱児研究』

→1985年改称『発達の遅れと教育』→2006年改称『特別支援教育研究』

1.4.4 「親たちの会」

機関名の変更：1952年設立「精神薄弱児育成会」（別名：「手をつなぐ親の会」）

→1955年改称「全国精神薄弱者育成会」

→1959年改称「全日本精神薄弱者育成会」

→1995年改称「全日本手をつなぐ育成会」

機関誌名の変更：1956年発刊『手をつなぐ親たち』

→1993年4月改称『手をつなぐ』

1.5 本人の「名前」を呼ぼう—大石坦—

大石^{ひろし}坦(1992)は「養護学校(特別支援学校—知的障害—)の立場」からの問題提起を行っている。重要点と思われる箇所を以下に引用する。

私[大石——引用者、以下同じ]としては、「ちえおくれ」「知恵遅れ」「障害児」「心身障害児」「学習遅延児」があまり用語の概念を明確にしないまま、これからも当分使用されるのではないかと思います。また本人に直接話す場合、こうした用語を使わず、本人の氏名を使いますから、必要な場面は研究会、研修会だと思います。用語以前の問題として、私ども[特別支援教育担当教員]が児童・生徒をどのように考え、どのように日頃接しているかがより重要だと思います。どんなに丁寧な言葉を使っても心の中で差別する気持ちがあれば、相手も敏感に感ずるでしょう。

日本語には、ことだま思想があり、精神薄弱の四文字の中に人間としての失格者とした意味あいが出てしまいます。 [大石 1992, p.40]

大石坦や真保^{しんぼ}(1992)が主張するように「本人の名前を呼ぶ」ということは、とても重要な視点である。そして「この子ら」は成人する。その時、「この子ら」→「この人ら」を、どう呼ぶかの議論は続いている。例えば、市川(2008)では、成人した「この人ら」を対幼児呼称(「ちゃん」「くん」呼び)する職員がいるが、それは「この人ら」を「永遠の子ども」(p.33)として固定化することになり、「この子ら」→「この人ら」への発達的可変性の否定(具体的には「この子ら」が不完全なまま、且つ^か発達しない状態で一生を送ることを想定すること)に繋がる可能性がある、と述べられている。

1.6 用語と偏見と語感—小出進—

小出^{こいですすむ}進(1992)は「語感と科学性の観点」からの問題提起を行っている。重要点と思われる箇所を以下に引用する。

もともと偏見に基づいた用語を使用する場合と、用語使用の史的過程で、偏見を含む語感が形成される場合がある。

戦前、教育界でよく使用された「劣等」「低能」、戦後、一般に使用されてきた「精神薄弱」などの各語は、いずれも偏見と結びつき、使用に耐えないか、耐えなくなりつつある。

主な偏見の一つは人格蔑視で、もう一つは反社会性・犯罪性の強調である。「精神薄弱」の語の場合、特に後者との結びつきが強い。

作業所作りに地域住民が反対する。同一地域で放火や殺人などの犯罪が発生すると、「精神薄弱」というだけで、疑われる。精神薄弱と反社会性・犯罪性を関係づける偏見のためである。

このような偏見が社会にある限り、どんな用語を使用しても、いずれは、用語と偏見が結びつき、好ましくない語感ができてしまう。

だからと言って、用語を改めてもしようがないと結論すべきではない。悪い語感をもつようになった用語は改めなければならない。 [小出 1992, p.41]

小出進は「語感と科学性」の観点から「用語と偏見と語感」の関係を明確に主張しているが、その契機となった伊藤隆二の提案(1990年の論文における「障害児」を廃して「啓発児」と呼ぼうということ)を松友了^{まつともりょう}は以下のように紹介している。

[松友了の発言——引用者、以下同じ] もう一つ、従来と違うのは、具体的な提案がなされるようになったということです。今日は都合でいらっやっていないけど、伊藤隆二さんの役割は大きかった。あの人の提案については私[松友]は批判的ですが、具体的にこういう表現をしようと提案したことは評価したい。

多くの人は、問題を分析したり、人の提案を批判したりするけども、こう変えたらいいんだという提案をしなかった。伊藤さんがとんでもないロマンチックな提案[「この子ら」を「啓発児」と呼ぼうという提案]をされたので、あんな用語になったら困るということで、みんな自分の提案を始めたように思います。

[清水・関・田ヶ谷・松友・山口・小出 1992, p.26]

なお、以上の松友の発言は、前後の文脈から考えれば、伊藤隆二への単なる「批判」ではなく、伊藤の提案（「障害児」を廃して「この子ら」を「啓発児」と呼ぼうという提案）により「精神薄弱」用語問題の議論が活発になったとの肯定的意味合いの発言である。

1.7 当事者の視点から—手塚直樹—

手塚直樹^{てづかなおき}(1992)は「労働の立場」からの問題提起を行っている。重要点と思われる個所を以下に引用する。

「精神薄弱」というよび名を否定し、用語問題として新しいよび名を設定しようとするとき、次の点に留意することはとても大切なことだと思う。

- 社会の中で生活する一人の人間としてどうとらえていくかということ。
- 人権の視点からとらえていくということ。
- 本人を中心にとらえていくこと。「よばれる」ではなく「本人がどうよぶか」ということ。
- 周囲を変えていく運動という視点からとらえていくこと。
- 他の障害と共通し関連性のあること。
- ことばの中に価値観を入れないこと。

等である。

[手塚 1992, p.43]

手塚直樹は「当事者の視点」から論じているが、さらに次の3名の論者の指摘は傾聴に値する。第一に「知的障害をもつ人たちは自分の障害と、その用語についてどう考えているか」(柴田 1992)ということ、第二に「用語と本人活動への影響」(松友 1999)について、第三には「当事者の自己決定の尊重と用語問題」(寺本 1999)である。

1.8 「精神」の「薄弱」？—江草安彦—

江草安彦(1992)は「社会福祉法人の立場」からの問題提起を行っている。重要点と思われる箇所を以下に引用する。

精神は「一般には物質・肉体に対立するものとしての心と同意味に用いられるが、とくに心的能力の高次なもの、すなわち科学や芸術などをつくる働きについていわれる(哲学辞典)」といわれています。精神医学では基本的精神状態として意識、知能、性格を指しています(諏訪望著：最新精神医学)。精神＝知能ではありません。したがって、精神薄弱、精神遅滞という用語は不適切です。その上、高次な人間性を示す「精神」が薄弱、遅滞ということになると、人格を否定する用語だともいえます。きわめて不適切なものといえましょう。

[江草 1992, p.44]

江草安彦は「社会福祉法人の立場」から「精神の薄弱」という言葉が指し示す差別的な意味に疑義を呈している。田ヶ谷(1992)では、田ヶ谷が勤務する施設(そだち園)では、更に具体的に、職員を「この子ら」「この人ら」が「先生」と呼びかけることはなく、「この子ら」(子ども)は、すべて「君」「さん」付けで、「この人ら」(成人)は、すべて「さん」付けで呼ばれている。それ以上に「この子ら」「この人ら」の幸せを最重要視し、その治療教育を推進すると共に、「この子ら」「この人ら」と地域社会の交流を盛んにするように努めている、と述べられている。

1.9 親の視点—皆川正治—

皆川正治(1992)は「親の立場」からの問題提起を行っている。重要点と思われる個所を以下に引用する。

用語についての親の意識調査では、強く改訂を求める声と何とも言えないとの声が相半ばする。嫌な用語に違いないが、変えても結局すぐ垢がつくので言葉にかかわらずに中身で勝負が大切、かえて曖昧になっては運動がしにくくなる、代わるいい用語が思いつかない等々である。〔皆川 1992, p.45〕

皆川正治や藤江(1992)・北沢(1992)が主張するように「親の視点」と言っても人それぞれであり、無論一つにはまとめられない。更には小出進が以下に紹介するように、保護者によっては「障害という言葉避けることは逃げであり、ごまかしだ」と考える人もいる。これは大変重要な指摘だと筆者は考える。

司会[小出進——引用者、以下同じ] 障害という言葉避けたいということですが、ある親御さんは、それを使うべきだと主張していました。たとえば、遅滞のほうが障害よりは柔らかい感じがするんですが、その親御さんは、事実は単なる遅滞ではなく障害なんだと言うんですね。そして、障害の言葉避けることは逃げであり、ごまかしだと言われ、障害の言葉を使うべきだと主張されていました。

〔清水・関・田ケ谷・松友・山口・小出 1992, pp.25-26〕

おわりに—まとめに代えて—

本稿では、1991年7月7日に行われた日本精神薄弱協会・第26回研究大会・シンポジウム「『精神薄弱』の呼称・用語および概念の再検討」(日本精神薄弱研究協会第26回研究大会実行委員会 1992)も視野に入れつつ、『発達障害研究』1992年第14巻第1号「特集『精神薄弱』用語問題を考える」を中心に検討を試みた。その結果、医学・心理学・教育学・福祉学・法学といった各学問分野からの議論のみならず、当事者や保護者の視点も加味され、検討が続けられたことが分かった。これらの検討が1992年7月24日の「日本精神薄弱研究協会」の評議員会及び総会において「日本発達障害学会」と改称することの決定に繋がっている。ただ「精神薄弱」という言葉は、法律文言(岩井 1999)はじめ、その他の名称から除去されたが、「発達障害」という言葉は残った。つまり「障害」という言葉は残ったのである。まだまだ、この時点では伊藤隆二教授の主張する「障害児」から「啓発児」への移行は、まだ始まってもいなかったのである。無論、現在に至っても達成されてはいないが、諦めず一步一步研究を深めて、このことに少しでも貢献したいと思う。

なお今後の課題であるが、次の3点の論文の発表を予定している。

1. 1992年の「精神薄弱」用語問題：『AIGO』（日本精神薄弱者愛護協会）1992年第39巻第5号から第7号の検討・考察。
2. 1992年の「精神薄弱」用語問題：『発達の遅れと教育』（全日本特殊教育研究連盟）1992年第415号の検討・考察。
3. 1992年の「精神薄弱」用語問題：1992年以降の動向、二つの「法律」から。

以上のことを通じて、伊藤教授が主張される、なぜ「この子らは世の光なり」なのか、また、なぜ「障害児」ではなく「啓発児」なのか、ということをも更に深く考えていきたい。

【引用文献】

The American Association on Mental Retardation [AAMR] (Ed.) (1992) *Mental Retardation: Definition, Classification, and Systems of Supports*. [9th Edition] Washington, D.C.: The American Association on Mental Retardation.

アメリカ精神遅滞学会 [AAMR] [編]・茂木俊彦[監訳](1999)『精神遅滞：定義・分類・サポートシステム』【第9版】学苑社。

有馬正高[話し手]・原仁[聴き手]・池田由紀江[聴き手](2010)「日本発達障害学会設立50周年記念プログラム『名誉会員に聴く』鼎談 有馬正高氏に聴く」『発達障害研究』（日本発達障害学会）**32(5)**, pp.471-485。
江草安彦(1992)「用語の重みを問う」『発達障害研究』（日本精神薄弱研究協会）**14(1)**, p.44。

藤江もと子(1992)「共に生き、共に暮らす隣人として」『AIGO』（日本精神薄弱者愛護協会）**39(5)**, pp.20-24。

長谷川泰造(1985)「『心神障害者』を救済しよう」『発達の遅れと教育』（全日本特殊教育研究連盟）**326**, p.1。

長谷川泰造(1992)「法律上の『精神薄弱』用語問題について」『発達障害研究』（日本精神薄弱研究協会）**14(1)**, pp.28-32。

市川和彦(2008)「知的障害者に対する呼称のありかたに関する考察—なぜ対幼児呼称(「ちゃん」「くん」呼び)が不適切なのか—」『キリスト教社会福祉学研究』（日本キリスト教社会福祉学会）**41**, pp.31-40。

池田由紀江[話し手]・菅野敦[聴き手]・小島道生[聴き手](2014)「日本発達障害学会設立50周年記念プログラム『名誉会員に聴く』鼎談 池田由紀江氏に聴く」『発達障害研究』（日本発達障害学会）**36(4)**, pp.390-395。

伊藤隆二(1983)「発達障害とは何か—新しい意味と解釈—」『教育と医学』（教育と医学の会・慶應通信）**31(10)**, pp.4-11。

伊藤隆二(1985)「発達の遅れている子どもたち—能力主義から『人間主義』への転換を—」『発達の遅れと教育』（全日本特殊教育研究連盟）**323**, pp.12-19。

伊藤隆二(1988)『この子らは世の光なり—親と子と教師のための生きることを考える本—』樹心社。

伊藤隆二(1990a)「『障害児』から『啓発児』へ—今まさに転回のとき—」『誕生日ありがとう運動のしおり』増刊101号, pp.1-5 [<http://www.maroon.dti.ne.jp/okuguchi/yougo.htm>]に転載のものから引用。

伊藤隆二(1990b)『なぜ「この子らは世の光なり」か—真実の人生を生きるために—』樹心社。

- 伊藤隆二(1991)『『精神薄弱』『障害』という用語を改正するために』『地域福祉における「用語」および社会的背景に関する研究—初年度研究報告書—』厚生省, pp.7-11。
- 伊藤隆二(1992)『『精神薄弱』用語問題の現状と展望』『発達障害研究』（日本精神薄弱研究協会）**14(1)**, pp.1-7。
- 伊藤隆二(1994a)「偏見・差別」石部元雄・伊藤隆二・中野善達・水野悌一(編)『ハンディキャップ教育・福祉事典 II 自立と生活・福祉・文化』福村出版, pp.878-888。
- 伊藤隆二(1994b)「宗教」石部元雄・伊藤隆二・中野善達・水野悌一(編)『ハンディキャップ教育・福祉事典 II 自立と生活・福祉・文化』福村出版, pp.929-938。
- 伊藤隆二(1995)『この子らに詫^わびる—「障害児」と呼ぶのはやめよう—』樹心社。
- 岩井美奈(1999)「精神薄弱の用語の整理のための関係法律の一部を改正する法律」『法令解説資料総覧』**211**, pp.61-65。
- 北沢清司(1992)「知的障害者の親の立場からみた人権と用語」『発達の遅れと教育』（全日本特殊教育研究連盟）**415**, pp.44-46。
- 小出進(1992)「語感と科学性の二面から考えて」『発達障害研究』（日本精神薄弱研究協会）**14(1)**, p.41。
- 松友了(1999)『『用語』の問題と本人活動』『発達』（ミネルヴァ書房）**20(80)**, pp.21-26。
- 皆川正治(1992)「社会の意識改革と本人の受容を考えて」『発達障害研究』（日本精神薄弱研究協会）**14(1)**, p.45。
- 日本精神薄弱研究協会第26回研究大会実行委員会(1992)「シンポジウム『「精神薄弱」の呼称・用語および概念の検討』の記録』『日本福祉大学研究紀要』**87(1)**, pp.199-265。
- 日本発達障害学会(2017)「日本発達障害学会の概要」<http://jasdd.org/gaiyo.html>
- 大石坦(1992)『『精神薄弱』について考える』『発達障害研究』（日本精神薄弱研究協会）**14(1)**, p.40。
- 櫻井芳郎(1992)『『精神薄弱』概念の再検討と『精神薄弱』用語の吟味』『発達障害研究』（日本精神薄弱研究協会）**14(1)**, pp.12-17。
- 柴田洋弥(1992)「知的障害をもつ人たちは自分の障害とその用語についてどう考えているのか」『発達の遅れと教育』（全日本特殊教育研究連盟）**415**, pp.47-49。
- 清水寛・関陽郎・田ヶ谷雅夫・松友了・山口薫・小出進(1992)「座談会 人権にかかわる用語をどう改めるか」『発達の遅れと教育』（全日本特殊教育研究連盟）**415**, pp.12-34。
- 真保真人(1992)「精神薄弱の呼称を改める意味」『AIGO』（日本精神薄弱者愛護協会）**39(5)**, pp.25-30。
- 田ヶ谷雅夫(1992)『『精神薄弱』の呼称と施設の暮らし』『AIGO』（日本精神薄弱者愛護協会）**39(5)**, pp.14-19。
- 高橋彰彦[話し手]・原仁[聴き手](2012)「日本発達障害学会設立50周年記念プログラム『名誉会員に聴く』鼎談 高橋彰彦江氏に聴く」『発達障害研究』（日本発達障害学会）**34(4)**, pp.427-434。
- 手塚直樹(1992)「主に労働の立場からの提言」『発達障害研究』（日本精神薄弱研究協会）**14(1)**, p.43。
- 寺本晃久(1999)「例外の再編」『発達』（ミネルヴァ書房）**20(80)**, pp.39-44。
- 山口薫(1985)『『精神薄弱』と『発達の遅れ』』『発達の遅れと教育』（全日本特殊教育研究連盟）**323**, pp.5-11。
- 山口薫(1992)「教育の立場から」『発達障害研究』（日本精神薄弱研究協会）**14(1)**, pp.18-22。

山口薫[話し手]・菅野敦[聴き手]・池田由紀江[聴き手](2011)「日本発達障害学会設立 50 周年記念プログラム『名誉会員に聴く』鼎談 山口薫氏に聴く」『発達障害研究』(日本発達障害学会)33(4), pp.447-452。